

祇園小学校 校長だより（第29号）

平成30年12月21日

「清心」

文責 校長 中原弘之

学校教育目標 「学校と地域を愛し、知・徳・体の調和のとれた児童の育成」

よいお年をお迎えください

平成30年も、あとわずかです。来年の5月1日からは何という元号になるのでしょうか・・・？ 干支は、戌（いぬ）年から亥（いのしし）年にバトンタッチです。大掃除・初詣など年末・年始の行事を子どもたちにも体験させるなどして、年の区切りを理解させるとともに、新たな年への希望を抱かせたいものです。

「あいさつ」と「靴・スリッパ並べ」

年末・年始はお客様を始め、子どもたちも多くの人と接することと思います。人との出会いの最初は「あいさつ」です。最後も「あいさつ」です。子どもたちも、心のこもった明るい「あいさつ」をするよう期待しています。

また、玄関に多くの靴が並ぶ機会も多いと思います。靴を脱ぎ捨てにするのではなく、きちんと手で揃え並べるようにしつけないといけません。併せて、トイレのスリッパも次の人が使いやすいように並べるようご指導をお願いいたします。

祇園歴史の旅（その29）「大村家と幸天六社大明神」

中部地区町内協議会設立25周年記念誌（平成20年発行）、佐世保史談会会員の筒井隆義さんの記念エッセーより抜粋。「佐世保の高天町の名のもととなった高天宮は、いま須佐神社に合祀されています。これは明治維新に伴う国家神道の普及に伴い、それまであった各種の神仏習合としての大権現、大明神を一律に『神社』としたうえで、郡社、郷社、村社、雑社と格付けし、一村に一社へと合祀令が出されたためです。

中部地区公民館管内には、高天宮、妙見宮、祇園宮、熊野権現、八龍権現など、数多くの宮社があったと思われる。神社名がそのまま町名に残っているのは、当時住んでいた人たちが、日々の生活の中で深く神仏を敬い、朝に夕に祈り、礼拝していたことを物語っています。

高天宮は高天神社として残っていました。昭和の年号を残す鳥居、石祠が須佐神社本殿左に移されています。この高天宮の本宮は、明治を迎えるまで、大村藩の藩主が代々祭祀する彼杵郡の鎮守社として格式を誇ってきました。その本宮は竹松村宮小路にあり、幸天六社大明神、別名昊天大明神と呼ばれました。

彼杵郡に含まれていた佐世保市域の村は、東から宮、針尾、早岐（折尾瀬と呼ばれた三川内を含む）、日宇、佐世保です。

ところが、日宇、佐世保の二村は、南北朝争乱の14世紀、西肥前一円の『松浦党一揆（一揆は志を同じくするとの意）』に加わり、早岐、針尾、宮は波佐見、時津、長崎などの彼杵一揆に連判しているのです。これは、佐世保、日宇が北の松浦氏の所領として、一時期大村氏の支配を受けただけで、豊臣秀吉の治政である天正14年（1586年）、宮と重尾の境界で両者の領域として確定し、明確に平戸松浦領になったことでも明らかです。

しかしながら、高天宮があることは、かつて大村氏が支配していたことを意味しています。『大村家覚書』という文書には、天文14年（1545年）に定めた大村氏の所領について『西は佐世保山中堂より』と記しており、大村領だったわけです。

山中堂は、現在も山の田水源地近くの桜木町にあり、この地が彼杵郡と松浦郡の境界の目印となっていたようです。ともかくも、高天宮はこうした土地の歴史を今に伝える役割を果たしているのです。」

次回は、「平戸往還沿いの史跡」と題して道路を中心に歴史を旅していきます・・・。